

ストア哲学は禁欲主義か

山口義久

はじめに

ストア哲学は禁欲主義か否か、このような問題を古代哲学の専門的な議論の場でとり上げることは、ひょっとしたら場違いではないかと懸念される。一つには、ストア哲学が禁欲主義だというのは通俗的な説明に過ぎず、専門家の主張ではないということがある。筆者も、ストア哲学が禁欲主義だという主張を学術論文で読んだことが動機となってこのテーマを論じようと考えたわけではない。したがって、学術論文やそれに類する機会に論じるべきテーマではないと考える人がいたとしても、それは無理もないことだと思われる。

また、禁欲主義という概念そのものが、哲学的議論に稔りをもたらすものと考えられない点も、同様の懸念を生むであろう。そもそも、曖昧模糊とした概念を用いて議論することによって、有意義な成果を得ることは期待できない。禁欲主義という概念は、哲学的立場として、必ずしも明瞭な規定とともに語られているとはいいがたいように思われるのである。

そういう事情はありながらも、一般にストア哲学＝禁欲主義という定式が広く通用していることは⁽¹⁾、看過できない事態のように思われる。この等式を頭に収めるだけでそれ以上知る必要はないと思ひ、ストア哲学に対する興味を封印してしまった人の数は数えきれないであろう。このことには、われわれ専門家の責任がないとは言えない。少なくとも、その定式が何らかの意義をもっているかどうかの検証をせずにいることは、無作為のそしりをまぬかれないと思われる。

また、その定式に含まれる問題点を整理して考察することができれば、ストア哲学の理解にもなにがしかの貢献が期待できるかもしれない。その定式が正しいかどうかの検証は、ストア哲学の内容の検討なしには行ないえないからである。そのような事情を踏まえうえで、ストア哲学＝禁欲主義という見方の問題点を明確化することが、拙論の目的である。

禁欲主義をどう理解するか

まず、禁欲主義という立場がどのようなものとして捉えられているか、代表的なものとして、平凡社の『哲学事典』の項目から抜粋して見てみよう⁽²⁾。

「禁欲は理性や意志により、さらには肉体を苦しめて、人間の欲望を抑え、倫理上、宗教上の目的を達することをいう。……これが一定の生活態度ないしは理論的態度となると禁欲主義となる。……倫理説がなんらかの当為を設定する以上ある程度の禁欲を要求するのは当然であるが、肉体自体を悪とみる立場では極端な禁欲、苦行を要求する。また非現世的、厭世的となる。キニク派、ストア派、新プラトン派、中世キリ

ストア教道徳、ショーペンハウアーなどがそれである。」

この項目がいろいろな意味で突っ込みどころ満載のように見えることはさておく。事典の項目を書くこと自体、突っ込みどころを残すことなくしては困難なことかもしれない⁽³⁾。事典の項目の字数制限は、正確さよりも簡潔さを要求することが多いことは、避けられない事情だと思われるからである。

この事典の説明において、いくつかの哲学的・宗教的立場に禁欲主義という名称が当てはめられているところから見ると、この項目の筆者は禁欲主義を、明確に定義された立場というよりは、ある種の傾向として捉えているのではないかと推測できる。そのような傾向としての禁欲主義という形容がストア哲学に当てはまるということは、簡単には否定できない。しかしそれは、同じ形容がたとえば新プラトン派にも当てはまるという程度の合致に過ぎないということも注意しておく必要があるだろう。

英語では、「禁欲主義」と訳せる言葉には、asceticism と stoicism がある。後者の意味の禁欲主義がストア哲学に当てはまらないという事態は考えにくいかもしれない。その言葉が通常大文字で表記される Stoicism から由来していることは、あまりにも明白だからである。しかしながら、同じように哲学的立場に由来をもつ epicurean、つまり享樂的と訳せる形容は、大文字の Epicurean すなわちエピクロスの徒に当てはまるとは言えないことは、古代哲学の専門家には周知のことであろう。少なくとも、エピクロス自身の言葉から、それが当てはまらないと主張することができる。

われわれが快樂が目的であると語るときは、ある人々が無知や不同意や取り違えのために見なしているように、放蕩者の快樂や享樂的な快樂を意味しているのではない。そうではなく、肉体の点でも苦痛なく、魂の点でもかき乱されないことを意味しているのだ(ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』(以下 D.L.) X131)。

ストア哲学の場合にも、同じような事情が考えられなくはない。ストア派に関する私の授業を聴いたことがある、ある研究者が、Stoic logic を禁欲的論理学と呼んでいたと人づてに聞いたことがある。言うまでもないことかもしれないが、それは誤解していたのではなく、一種の諧謔だったらしい。ただ、本人の意図がどうであったかにかかわらず、この表現自体、stoic=禁欲的という等式の妥当性に対する巧まざる批判になっていると受けとめることもできるであろう。

このことに関する、エピクロスの場合との違いに注意を向けることには、多少とも意味があるように思われる。エピクロスの場合には、エピクロスの快樂主義とエピキュリアンの生き方(あるいは享樂主義的な生き方、つまり快樂をとことん積極的に追求する生き方)とは、大きく異なるというか隔たっているが、その違いは倫理的な問題の範囲内での相違である。それに対して禁欲的論理学というのは、漢字の偏を異にする二つの分野の間のカテゴリーギャップがからんでいるので、滑稽な表現となりうるのではないだろうか。

哲学的な立場として考えると、この違いはけっして小さなものではない。エピクロスとの関係では、快樂主義の立場も(いわゆる)享樂主義の立場も、同様に倫理学の領域、しかも幸福論の文脈において問題にされるので、享樂主義的快樂主義という表現も有意味で

ある（他方、快楽主義的享楽主義という表現は有意味でないと言えないとしても適切な表現ではないが、それは快楽主義が享楽主義をも包括する概念であるからにすぎない）。エピク羅斯は、享楽主義の立場を採らないことを明言しているので、彼の快楽主義は享楽主義的快楽主義ではないのである。

したがって、禁欲主義的快楽主義という表現も、有意味になる可能性がある。もっとも、禁欲主義と快楽主義が両立しないものであるという前提を立てれば、その表現は形容矛盾であることになる。しかし実際には、エピク羅斯の立場はその呼び方で特徴づけることができるものであった。少なくとも、ある種の欲望を抑えることによって目的を実現すべしという教えは、禁欲主義の特徴そのものだと言える。エピク羅斯のそのような特徴は、たとえば次のような言葉から明らかである。

自然本性は強いるべきものではなく、それに従うべきである。われわれが、必要不可欠な欲望と、害を及ぼさない範囲の自然本来の欲望は満たしても、有害な欲望はきびしくしりぞけるなら、われわれは自然本来のあり方に従うことになるだろう（断片（Sent.Vat.）21）。

そうであるなら、快楽主義と禁欲主義の対極性ということも、まったく疑わしいものになる。禁欲主義の対極にくるものは、たんなる快楽主義ではなく、おそらく享楽主義であろう。快楽につながる欲求を無制限に追求するのが享楽主義であるなら、その立場は禁欲主義とは正反対だと言えるからである。しかし、非享楽主義的快楽主義は、エピク羅斯の例に見られるように、禁欲主義と両立しうると思われる。

その場合の禁欲主義とは、禁欲を目的実現の枢要な手段とする立場という意味に理解すべきであろう。この点は、先の『哲学事典』の説明にも含まれており、その項目の説明の枝葉を削ぎ落とせば、この点に禁欲主義の中心的特徴があると考えられることのできる。その事典の記述も、そのかぎりにおいては適切と言えるかもしれない。

理屈だけで考えれば、禁欲を目的とする立場も禁欲主義と呼べると思われるし、こちらのほうが純然たる禁欲主義だと言えそうであるが、はたして禁欲のために禁欲を求める立場が実際にありうるかどうかは疑問である。かりに禁欲＝幸福と見なす人がいたとしても、禁欲が幸福のために求められるという言い方は依然として可能である。ただし、それはちょうど、快楽＝幸福と考える人にとっても、快楽が幸福のために求められるという言い方が有意味であるのと同様に聞こえる。しかし、快楽＝幸福と考える人がいるのと同様の仕方で、禁欲＝幸福と考える人がいるかどうか、そもそも信じがたい。少なくとも、幸福への欲求を抑制することが幸福であるとは思えないのである。

さて、禁欲主義をそのように理解するならば、英語の *stoicism* を禁欲主義という日本語で理解することが適切であるかという疑問も生じてくる。*Stoicism* の典型的な（辞書的な）説明は、*an indifference to pleasure or pain* といったものであるが⁽⁴⁾、このような意味での *stoicism* は、上で見たような意味の禁欲主義、つまり禁欲を目的とする立場、もしくは禁欲によって目的が達成されるとする立場を含意しているわけではないし、その立場から帰結する態度でもない。

別の辞書的規定を見ると、*stoic* という名詞が *person who has great self-control and who endures pain, discomfort or misfortune without complaining or showing signs of feeling it* というような規定をあたえられたりしている⁽⁵⁾。

この説明は、実際にストアの哲学者たちにも当てはまりそうに思える。概括的に言って、*epicurean* とか *epicure* といった言葉は、実際のエピクロスの見解というよりは快楽主義一般あるいは享楽主義的快楽主義を念頭において用いられるのに対して、*stoic* という言葉は、実際のストア哲学をイメージして使われることが多いのではないかという印象を受ける。

もちろんそのような形容も、ストア哲学の思想内容の表現ではなく、ストアの哲人を外から描写した特徴でしかないという意味では、ストア哲学の主張と必ずしも一致しないと言わざるをえないが、その点は禁欲主義の問題とは直接つながらないと思われるので、ここではこれ以上追求しない。しかし、*stoic* にあたえられた上の規定も、苦痛や不運を感じていないかのように堪えると言われる点で、禁欲主義が肉体を苦しめたり、欲望を抑えたりするという表現から想像できる、無理して堪えているように見える態度とは、一線を画しているように見える。

ストア哲学は禁欲を目的とするか

この問いには、誰でも明確に答えることができるであろう。ストア派の目的は定式化されたかたちで述べられているからである。それを一つ一つ確認することで、ストア派が定式化した目的の中に禁欲に相当する要素が含まれていないことが理解できる。

目的のことをゼノンはこう説明した、「合致して生きること」と。これはすなわち、一つの一致したロゴスにもとづいて生きるということであり、不一致・撞着した生き方をしている人は不幸だと考えているのである。だが彼の後継者たちは、ゼノンによって言われた述語づけが不足のあるものだと考えて、「自然に合致して生きること」と言った（ストバイオス『抜粋集』II 75, 1）。

まずゼノンの定式であるが、「合致して生きること」ということは、何に合致するのであれ、ただちに禁欲と結びつくものではない。少なくとも、禁欲そのものが目的とされているのではないことは明らかである。ゼノンの後継者たちは、この定式に「自然（本性）に」という言葉をつけ加えたと伝えられる。この付け加えがゼノンの意図に合致するかどうかはさておき、この付加によっても禁欲が目的として浮かび上がってくることはない。

それらの定式の中で、クリュシッポスのものは、彼らしい晦渋さを感じさせる定式であるが、そのなかに今の問題との関係で注目すべき記述が含まれている。

徳に従って生きることは、クリュシッポスが『目的について』第一巻で述べるところでは、自然本性によって起こる事柄の経験にもとづいて生きることに等しい。なぜなら、われわれの自然本性は世界全体のその部分だからであり、だからこそ自然に合致して生きることが目的となるのである。このことは、自己の自然本性にだけでなく、世界全体の自然本性にも従って……生きることである（D.L. VII 87=SVF III 4）。

ここで、「自然本性によって起こる事柄の経験」と語られるものが、どのような内容をもっているのかは、この表現だけでは明らかでない。しかし、この定式を念頭においていると思われるポセイドニオスの批判（SVF III 12）は、この定式が初期ストア派の、べつの説明と関係していることを示唆する。

この点をおろそかにして、ある人々は「合致して生きる」ことを、自然本性にとって第一のこのために可能なことは何でも行なうということに還元し、快や労苦のなさなどを目標として立てることと同じように考えている。しかし、彼らの発言そのものが明白な矛盾を露呈しており、立派なことや幸福にすることは、ぜんぜん含んでいない。それらは目的に必然的に伴うが、目的ではないのである。この点が正しく区別されれば、詭弁家たちが提出する難問を解消するために使うことができる。しかし、全体としての自然本性によって起こる事柄の経験にしたがって生きるというのでは使えない（ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの教説』第5巻470—471）。

その説明というのは、自然本性にしたがった (*kata physin*) ものと、自然本性に反した (*para physin*) ものの区別であるが、その区別における「自然本性にしたがったもの」は、クリュシッポスの目的の定式における「自然本性によって (*physei*) 起こるもの」と対応しているものとして理解することができる。「自然本性にしたがった」ものは「選択されうるもの」であり、そのうちには「それ自体として選択されうるもの」が含まれていて、その例として健康、よい感覚、苦勞のなさなどが挙げられているのである。

ポセイドニオスは、クリュシッポスの定式の意味を、そのような意味で「自然本性にしたがったもの」として捉え、快樂や勞苦のなさを目標とするのと同様のこととして語っている。その批判の要点は、そういったものが目的に必然的につき従っていても、目的ではないという点にあるが、その批判を離れて、われわれの問題との関係を考えてみるなら、クリュシッポスの定式が、禁欲を含意するよりむしろ禁欲とは反対の方向を志向しているように見えることは、注目に値する。快樂への欲求を抑えるどころか、快樂を目標とするような仕方では、ストア哲学は快樂主義と親和性があるように見えるのである。

アパテイアは禁欲主義的な特徴か

目的の定式としては現れないが、ストア哲学における理想的な境地としてアパテイアすなわちパトスの超克が考えられていたことは疑いない⁽⁶⁾。パトスのうちには、欲望も快樂・苦痛も含まれているので、それらを克服することは一種の禁欲と見なすことができるのではないか。そうだとすると、ストアの立場は一種の禁欲を目標とする禁欲主義だということになるであろう。

そこで、アパテイアは一種の禁欲であるのか否かを考えなければならない。まず『哲学事典』に見られたような禁欲の規定は、ストア派のアパテイアに当てはまらないのは明らかである。理性や意志によって人間の欲望を抑えるという発想そのものが、ストア派の捉え方とは合致しない。なぜなら、初期ストア派の見方では、理性と欲望は魂の異なる部分ではなく、同じ主導的部分の異なるはたらきに過ぎないからである⁽⁷⁾。同じ部分が、あるときにはロゴスとしてはたらき、あるときにはパトスとしてはたらいて、パトスとしてはたらくことがなくなったとき、アパテイアの境地に達したと言えるのである。

そのことは、禁欲という言葉が無理やり我慢しているというニュアンスを引きずっていることとも無関係ではないであろう。理性と欲望が対立している要素としてあるかぎり、いかに理性が欲望を完全に支配したとしても、欲望は抑圧されたものとしてあり続けると考えられる。何らかの事情で理性が弱まって支配する力を失ったとき、欲望が再び主導権を握るかもしれない。力関係がいかに一方的になっても、二つの力の綱引きのような関係は解消されないのである。

ストア派の立場でも、主導的部分がロゴスとしてはたらいているときは、言わば理性的に振る舞っているが、それがパトスとしてはたらくようになると、欲望や感情のおもむくままに振る舞うと言える。これは理性が支配権をえた状態と、情念が主導権をえた状態との交替と一見同じに見えるが、どこが違うのであろうか。根本的な相違点は、魂の中に、葛藤する複数の別々の部分を認めるかどうかである。歴史的に初期ストア派の立場は少数派にとどまるが、これは簡単に決着のつく問題のようには思えない。

ストア派は、いわゆる葛藤という現象を、魂の別々の部分の対立と考えないことで、どのような説明を代わりに提出したか。それは異なる判断の間の対立である。目の前のご馳走が美味しそうだという表象に同意をあたえることと、何らかの状況認識（たとえば、そのご馳走そのものが有害である、あるいはそれを食べることが有害である）にもとづいて、食べるべきでないものという表象に同意をあたえることは、二つの異なる判断であり、その判断同士の対立は、二つの部分の力関係を前提することなしに成立する。そしてパトスそのものも、まさにそのような判断として捉えられているのである。

彼らは、クリュシッポスが『パトスについて』で主張しているところでは、もろもろのパトスは判断であると考えている。というのは、金銭欲はお金がいいものだという想念であり、酩酊や放埒その他も同様だから（ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』Ⅶ 111=SVF Ⅲ 456）。

その見方にもとづけば、一貫してことわりにしたかった判断ができるようになれば、パ

トスとして振る舞うことはなくなり、パトスを超克したあり方、言わばアパテイアが実現することになるのである。これは禁欲という言葉が意味しうることから、大きく隔たっているのではないか。禁欲という概念は、いわゆる理性的な判断と欲求が対立する場合に、欲求のほうを抑制するという意味に理解できるが、ストア派の見方では、そのような対立そのものがありえないのである。

さて、それでは、アパテイアが禁欲であるというためには、ほかのどのような解釈の可能性がありうるであろうか。先述の英英辞典の規定のように、ストア派に当てはまる形容としての *stoicism* を考えれば、アパテイアはそれに合致しているという意味で禁欲だと考えることができるかもしれない。そうすれば、欲望を抑えるのではなく、欲望を超克していることが禁欲だと考えることになる。ストア派がそのような境地を目標にしていたことは否定することができないので、ストア哲学は禁欲を目的とする立場としての禁欲主義だと言えるかもしれない。

しかしながら、これはストア哲学＝禁欲主義という主張（言い換えれば、ストア哲学は禁欲主義だから禁欲主義なのだという主張）をかたちを変えて繰り返しただけのことに過ぎないであろう。この意味での禁欲が、ほかの禁欲主義の立場にも当てはまるのであれば、ストア哲学が禁欲主義という特徴をそなえていると言うことができるが、それがストア派の立場にしか当てはまらないのであれば、それを目標とする立場を禁欲主義と呼んだとしても、その意味はストア哲学の別名に留まるものであって、ストア哲学が一般的な意味での禁欲主義に属していることにはならない。

ストア哲学の目的は禁欲によって達成されるか

目的とされる幸福の境地が、どのようなものであろうとも、それに到達するための手段が禁欲であるならば、その立場は禁欲主義と呼ぶことができると思われる。エピクロスの場合は、目的とされる快樂が享樂主義的なものでないだけでなく、その目的を達成するための手段としても、禁欲が重要な役割を担っていた。ストア派の場合は、目的が禁欲的な手段によって実現されると考えられているのであろうか。

ストア派の目的は定式としてあたえられているが、その目的に到達するための道筋には、そのような定式をあたえることはできないのではないかと考えられる。もしもそのような定式があつて、それにしたがえば目的が達成されるのであれば、ストアの哲学者たちは、皆例外なく目的を達成し、知者の境地に到達していたかもしれない。ところが、逆にそんな人はほとんどいなかったと言われるのである⁽⁸⁾。

目的達成の手段が定式化されないことは、目的とされる境地の到達困難さとも関係があるかもしれない。目的には、「自然（本性）に合致して生きること」など、さまざまな表現があたえられるが、実質的には、徳にしたがって生きること、つまりは知者として生きることだと言える。その知者であるための条件の厳しさと言うか、その理想の高さは、その実現手段をも、簡単なものにしてはおかないだろう。いかに高い理想でも、手段が簡単であれば実現できるはずだからである。

また、ストア派の理想的人間像である知者が持たなければならないものは、知恵とも徳

とも形容できるが、それが知恵と呼べるものであるからには、禁欲というような単純な手段によって獲得できるものとは考えられない。それを徳と呼ぶ場合でも、ストア派の見方にしたえば徳は知であるので、同じことが言えることになる。ただし、この知恵あるいは知は、何でも知っている「全知」というようなものではない。

もちろん禁欲が知恵の実現に役立たないと主張することはできない。欲望に支配されないことがひとの理解力を高めることは十分あり得るからである。だがしかし、理解すべき事柄は、禁欲から出てくるわけではない。禁欲以外の要素なしには、知恵の獲得がありえないことは確かである。むしろその要素のほうが、ストア哲学の目的の達成の手段だと考えることができよう。

そのように考えれば、ストア哲学が禁欲主義でないということは、禁欲を目的実現の手段とするわけではないという点からも言えることになる。このようにして、ストア哲学が禁欲主義ではないということは、禁欲を目的としていないということからも、目ざされる境地が禁欲的と言えないということからも、目的実現の手段が禁欲でないということからも言えることになる。禁欲主義と形容することができる場合がほかになければ、ストア哲学は禁欲主義ではないと断定してもいいであろう。

付記

発表に際しては、多数の方々から貴重なご意見、ご質問をいただいた。たとえばキリスト教思想家における禁欲の意味など、示唆に富んでいると思われるが、執筆に当たってそれを生かすことはできなかった。

他方、ストア哲学の特異性については、質疑を通じて、少なくとも特異性の所在を示すことはできたのではないかと考える。とくに、パトスが判断であるというストア派の捉え方は、他の学派の見方を前提にして考えると理解しがたいものであることを、筆者自身も質疑を通じて再認識することができた。これは、判断が知的な活動として知性あるいは理性に属し、パトスは情念として理性とは区別されるという見方が、われわれの捉え方にいかに深く浸透しているかの現れであるように思われる。

その問題は、本論でも触れた、ストア派における理性と欲望が魂の同一の部分のはたらきであるという見方が、歴史的に少数派にとどまっているという事情と表裏一体の関係にある。魂の対立するはたらきが、部分の違いを含意するというのを初めて明確に述べたのはプラトンであると思われるが、その根拠は、同一のものが同時に同じ観点で対立する二つのことを行うことはできないというものであった。内面的葛藤はそのような事態であると考えられるので、魂の中にも、それに対応する対立する部分があるという見方が説得力をもつことになる。

ストア派の見方は、魂の主導的部分に対立するはたらきを帰属させながら、それを別々の部分に分けない点で特異であるが、対立するはたらきが同時になされるとは考えていない。あるときはロゴスとしてはたらき、あるときはパトスとしてはたらくと考えているのである。プラトンの論理にしたがっても、同時ではないいじょう、異なる部分のはたらき

と考える必要はなくなる。そのような意味で、ストア派の見方は少数派ではあるけれども、理屈を無視した主張がなされているわけではないと思われる。

本論でストア派として扱ったのは、その典型と考える初期ストア派であるが、後期つまりローマのストア派は、もっと禁欲主義的であったのではないかという指摘もいただいた。そういう印象は否定できないであろう。しかし、それは漠然とした意味での禁欲主義であり、本論の趣旨にのっとり禁欲主義の意味を厳密に考えてみようとすれば、ローマのストア派といえども、禁欲を目的とするという意味でも、禁欲を目的達成の手段とするという意味でも、禁欲主義とは言えないであろう。

註

- (1) たとえば、筆者の手許にたまたまある昔の倫理・社会の教科書には、「ストア派・エピクロス派の生きかたは、ヘレニズム-ローマ時代の人々の心をつかんでおおいに広まった。そしてこれは、近代になっても人々に大きな影響を与えている。現代でも使用されるストイシアン（禁欲主義者）とかエピキュリアン（享楽主義者）ということばは、今のべたストアやエピクロスに由来している」という記述がある。『倫理・社会』改訂版、昭和42年、三省堂、55頁。
- (2) 『哲学事典』昭和46年、平凡社、361頁。
- (3) 筆者も『現代倫理学事典』（平成18年、弘文堂）において「ストア主義」という項目を執筆した際、「古代ストア哲学に対する典型的な誤解は、その特徴を禁欲主義と見ることである」と書いたが、これは多くの人にとって突っ込みどころと見えるであろう。本論はそれにたいする答えの意味ももっている。
- (4) *Collins English Dictionary - complete & unabridged* 10th ed., 2009, William Collins Sons & Co. Ltd.
- (5) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* 4th ed., 1989, Oxford.
- (6) SVF III 443 以下。とくにIII 444（「ストア派はあらゆるパトスを—魂はその衝動によって動揺させられるのだが—人間から除き去るのである。」Lactantius）、III 448（「彼らは知者がパトスに陥ることがないがゆえにパトスをもたない者だと言う。」D.L.）。
- (7) SVF II 826 など参照。ストア派は魂に部分がないと主張しているわけではない。主導的部分から五感など七つの部分がタコの脚のように枝分かれしていると言われる。この部分が言わば中枢として、魂のすべての機能の中心におかれ、ロゴスもパトスもその同じ部分のはたらきとされるのである。
- (8) SVF III 662（「クリュシッポスは、自分自身をも、自分の知り合いや指導者のうちの誰をも「優れた」人とは言わなかった。」Plutarchus）